

演題 乳歯列過蓋咬合の改善の推移についての考察

○有田信一、有田光太郎、有田有沙、友重文子、川口芳己

所属 ありた小児・矯正歯科

【目的】

日常臨床を通じて、過蓋咬合の小児が多くなったという印象を持つ小児歯科医も少なくない。一方、乳歯列において、深いOver bite (OB)は、通常であれば、2歳から3歳にかけて、改善することが知られている。1) 2) しかし、この時期に改善しない症例も多い。

そこで、深いOBが改善した症例としなかった症例を継続的に観察した結果、幾つかの知見が得られた。今回はOBが改善する要因について考察したので報告する。

【方法】

2012年(平成24年)1月から12月に来院した0歳児から3歳児 190名を口腔内写真で歯列咬合を分類し、過蓋咬合症例を2017年(平成29年)6月まで観察を行い、改善した症例を継続的に観察した。

過蓋咬合の基準は下顎乳前歯が口蓋軟組織に接触している歯列とした。口腔内写真による判定は、写真を撮影した熟練の歯科衛生士2名が判定を行った。

【結果】

1) 2012年度来院の小児の歯列咬合別の割合では、0歳から2歳では過蓋咬合は55%以上を占め、3歳では33%に減少した。

2) 正常咬合の割合は0歳は11%、1歳では21%、2歳では31%、3歳では46%に増加した。

3) 過蓋咬合が改善した症例を観察した結果、次の知見を得た。

①Eの萌出完了期より遅れた時期に、乳白歯が頬舌的に整直し、深いOBの改善が観られた。同時に、歯間空隙が増加している症例が多く観られた。

②下顎前歯交換期には、下顎永久前歯の萌出

に伴い、下顎乳前歯(永久前歯)の唇側への傾斜が生じ、深いOBが改善していた。

表1

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳
N	9	47	62	70
正常	11.1%	21.3%	30.6%	45.7%
過蓋咬合	55.6%	57.4%	50.0%	32.9%
反対咬合	33.3%	21.3%	12.9%	11.4%
開咬	0.0%	0.0%	3.2%	5.7%
切端咬合	0.0%	0.0%	3.2%	4.3%

【考察】

1) 3歳における過蓋咬合の割合は約33%と、過去の報告2),3)に比較して、多い傾向であった。ちなみに、平嶺らの報告2)では、上顎前突と過蓋咬合を合わせた3歳の割合は15.7%である。

2) 乳歯列咬合の深いOBの改善は、Eの萌出により行われると考えていたが、今回の観察の結果、OBの改善はEの萌出時期より遅れて生じていることから、OB改善はEの萌出(存在)が要因ではなく、上下Eの萌出が摂食機能(特に咀嚼機能)の発達が進んだことにより、上下臼歯部の頬舌的に整直したと考えた。また、下顎永久前歯の萌出期にOBが改善していた症例も多かったことから、下顎永久前歯の萌出に伴い、下顎Aあるいは1番が唇側へ拡大(傾斜)することで、OBの改善が生じると考察した。

【文献】

1) T. M. Graber : Orthodontics, principles and practice, 3rd edition, 1972

2) 平嶺小百合ほか、1歳6ヶ月から3歳にいたる小児の咬合状態の推移に関する累計的調査、歯科学報、96:837-843、1996

3) 町田幸雄：乳歯列から始めよう咬合誘導、一世出版株式会社、77-81、2012